

第1回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事概要

※この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

| | |
|-------|---|
| 日 時 | 平成21年12月2日（水） 16：30～18：38 |
| 会 場 | 仙台市役所 2階 第四委員会室 |
| 出席委員 | 江成委員、大滝委員、西大立目委員、庭野委員、間庭委員、柳井委員 [6名] |
| 欠席委員 | 小野田委員、小松委員 [2名] |
| 仙 台 市 | 企画市民局次長、総合政策部長、総合計画課長、総合計画課主幹(2) |
| 次 第 | 1 開会 2 委員長選出 3 委員長あいさつ 4 議事 (1) 委員会の運営に関する事項について (2) 新しい基本構想策定に向けての意見交換 (3) その他 5 閉会 |
| 配付資料 | 資料1 仙台市総合計画審議会起草委員会委員名簿 資料2 仙台市総合計画審議会起草委員会の運営について（案） 資料3 第2回総合計画審議会における審議会委員の意見概要 資料4 新基本構想の策定に関する基本的考え方（案） |

会議の概要

○委員長選出

- ・委員長に大滝委員が選出された。

○議事

(1) 委員会の運営に関する事項について

- ・事務局から資料2を基に、審議会本体のルールに合わせる旨の説明を行い、了承された。

(2) 新しい基本構想策定に向けての意見交換

- ・事務局から資料3および資料4を基に説明し、その後、委員での意見交換を行った。

<主な意見等>

- ・成熟社会や持続可能、新たな成長という概念の相互関連が微妙。どういった関係性で用いているのか、その考え方を共有したい。
→事務局としても悩んでいる部分。成熟社会とは量的な右肩下がり、縮小の時代だとの認識は共有されるが、その先は、量的縮小に合わせた価値観の転換と、質的向上のための成長基盤の確保とに意見が分かれるところ。ただし、事務局としては、成熟社会を支えるための基盤が特に経済の面で揺らいでおり、これに手を打たない限り、成熟社会のプラスの面である豊かさや質的向上を支え切れなくなるとの危機感を持っている。他方、そうした成熟社会のとらえ方自体、いろいろなお考えがあると思う。率直にご指導いただきたい。
- ・現行の基本構想はなかなか立派。基本構想なので具体性に欠けるからこそ今読んででも通用する内容なのだろう。したがって、基本構想の見直しに当たっては、この基本構想の下での計画の進展状況を確認しつつ、基本構想の該当する部分の記述をどのように修正するか、見ていく必要があるのではないか。
- ・未来に向けての大きな変化は2つ。一つはストック社会。わかりやすい例で言えば、これからは家が相当余ってくる。これをどう次世代に結び付けていくか。もう一つは賃金水準。中国など今後活躍するだろう国々と日本の賃金水準が取れんしていく。長期的には、日本の賃金がずっと下がっていく。そういった社会では、地域政策のやり方も変えていかなければならない。これまでのような縦割りではなく、例えば、文化を文化だけでとらえるのではなく、そこから産業が発生し、雇用が発生し、新しい人の集まりができるような施策のあり方を考える必要がある。
- ・現行の基本構想は、仙台の市民像を真正面からとらえている感じがしない。今後の非常に静かな社会では、市民一人ひとりの力が、街の活力としてすごく重要。市民の美意識の涵養、健康の保持、運動の場の確保、安心・安全の保障などについて、もう少し基本構想で取り上げてもいいのではないか。また、学生が卒業後に東京に行ってしまうことについても、雇用確保の話だけでは悲観的になるので、彼らをもっと仙台で暮らしたいと思うような文化戦略も含めてより総合的な施策にチャレンジする。そういう施策は仙台独自の施策になりうる。

- ・成熟社会というのは概念としてはわかっている、そこでどう暮らせば充足感が得られるのか、具体的なイメージを私たちはまだ持っていないのではないかと。基本構想についても、これまで総合性がとても大事にされてきたが、今後はもう少し突出した具体的な都市像が出てきてもよいのではないかと。成熟社会は、市民がそれぞれ考えをもち、行動し、自分たちの問題を自分たちで解決する社会だと思ふ。市民が仙台をつくるということを打ち出し、手法だけではなく、本当の意味での市民協働に至るようにしたい。市役所の役割もとても重要になる。
- ・成熟社会というとフィンランドやスウェーデンなどの北欧諸国がイメージされるが、ヨーロッパは徐々に成熟化していく中で、それを支えるための財力とインフラを確保できた。しかし、日本、仙台はそれが急激にやってくる。これにチャレンジしなければならない。現行の基本構想にも、今から手を打っておく必要があるという危機感が反映されている。仙台が北欧になる必要は全くないが、今は、仙台として成熟社会に対してどういう段階を踏んで進むのか、ただならない挑戦を受けている感じではないか。
- ・想定される社会をある程度共有して議論する必要がある。賃金が減る、ストック社会に入る、市民個人の力が前面に出てくる、高齢社会を迎える、というような流れ。これをある人は現状から、ある人は社会トレンドから、ある人は理想から語り始めるとまとまらない。議論のベクトルを合わせる必要がある。
- ・大事なものは都市像と市民の暮らし。価値観であり押し付けはよくないが、いろいろなアンケートなどで市民の意向を汲んでいけば、多様ではあっても、市民の価値観がおおよそ見えてくるのではないかと。そうして見えてきたものにどう取り組むのか。おそらく企業や市民、行政がみんなできなければならない。これを戦略的に進めると、仙台に暮らし続けていきたい、働く機会が確保される、などの結果に繋がっていくのではないかと。また、仙台に暮らしたいという気持ちをはぐくむ意味では、現状として、子供や若い人たちが持っている、仙台の歴史や文化、自然などに関する知識が少なすぎる。歴史を思うからこそ見えてくるものもある。仙台に愛着を持った人材をはぐくみ、東北へ、世界へ送り出す。仙台の都市像の担い手を育成する。そういった循環がないと、成熟社会には立ち向かえないのではないかと。
- ・セントラル自動車は仙台市内に来るわけではないが、仙台という母都市があるからこそ近くにきた。仙台が仙台であることをきちっと自覚して、東北と連携する仙台のあり方、東北のアンテナ機能を果たすような仙台としての懐の深さを、基本構想の中でも見せていく必要がある。
- ・市民の行動力や活力という意味では、仙台には伝統がある。市民が何かを動かしていく、政策をつくっていく、お祭りやイベントをつくっていく、古いものを再発見・再考していく、こうした事例がたくさんある。大きな伝統であり資産であるし、これらをいろんな分野に広げ、ひとつのアイデンティティーをつくり込めるのではないかと。
- ・現基本構想では、仙台の役割としてアジアと東北をつなぐとあるが、もっと東北との関係を前面に出すべき。東北に住んでいる方は、子供が結婚して生活しているとか、孫が大学に行っているとか、親戚が住んでいるとか、何か関係を持った街として仙台を見てくれて

いる。東北の中での仙台の役割はますます大きくなっていく。東北の一次産業や二次産業をつないだり、編集しなおしたり、新しい価値をつくっていく役割は、仙台が担っていくべき。

- 学会で海外に行くと、仙台を知っている方はほぼいない。いきなり世界というよりは、まずは東北の中核都市として果たすべき役割がまずあるのではないか。基本構想自体は理念を打ち出す部分であり、あらためて理念は何かをまとめていくのがよい。加えて、今後起こりうる様々な変化への対応を明確にしていくことが必要。人口や経済の低迷は上げられているが、それ以外でも不確定要素があるかどうか精査が必要。
- 経済変動は常に起こりうるので、3～5年の動きにはあまりとらわれず、質的变化をとらえて、その上でどういう都市を目指したいのか、どう暮らしたいのか、どう働きたいのか、考えるべき。その方が市民も共感できるのではないか。
- 結局は、仙台の資源をどう生かすのかという話。それには、景観や人など、仙台の資源は何なのか、理解し合うことが必要。人材の生かし方についても、地元定着もよいが、東北に必要な人材を輩出していることも一つの方法。彼らが途中で、あるいはリタイヤしてから仙台に戻ってきて活躍すれば尚よい。そのために、仙台の資源をどう生かすのか、そういった視点が必要ではないか。
- 東北を考えれば、仙台の強みとしては、通信・交通（空港、港湾、道路、鉄道）ネットワークの拠点性が挙げられる。新幹線の八戸駅が開業したとき、東京からの新幹線で一番人数が増えたのは仙台。来年は青森駅が開業するが、同じ現象が起こると予測されている。東北のために役立つ形にすると、仙台に何らかの形で戻ってくる、そういう仕組みがすでにある。暮らしやすさも含めて、仙台の優れて良い部分が交流人口や企業の立地に繋がっていくので、仙台がそれをどう支えて、東北との循環関係を構築するのか、施策として非常に重要なものだと認識している。
- これまでの時代は、地方交付税交付金など、国からある程度お金をもらえたので、極論すれば、産業経済の施策は無視しても大丈夫だった。しかし、これだけ財政赤字が深刻化してくると、産業経済施策や都市の基盤整理をきちっと位置づけておかないと後々本当に大変なことになると、個人的には危機感を持っている。
- 例えば、2015年に地下鉄東西線が通るが、こういう話を軸に産業政策なども考えていく必要がある。一つのを多重活用して、さらに生かしていくつくり方が必要。
- 環境や低炭素社会についても、それだけが前面に出ると、市民からは自分には関係ないものととらえられる。地下鉄東西線のような交通や土地利用の問題とセットであれば、暮らし、まちというものとのつながり、市民にとっても非常に身近になる。地下鉄東西線についても、総合交通体系の大改編により市民生活がより豊かになるという形で提示できれば、共感を得やすいしわかりやすい。やはり、より生活に近いレベルから打ち出していった方がよいのではないか。
- これまで出たような意見を基本構想にどこまで書き込むのかについては、基本計画との住み分けの意味で、今後も議論が必要。
- 仙台の立ち位置を考えたときに、世界やアジアの経済の中で日本の地位が相対的に低くな

っていく。下手をすると飲み込まれるのではないかと危機感を持っている。世界とは言わないまでも、少なくともアジアの中で仙台がどういう役割を担っていくのか、基本構想のどこかでは触れておかなければならない。仙台としての何らかのイニシアチブがほしい。

- 中国に行っても仙台は知られていないが、魯迅のいたところと説明するとすぐにわかる。2050年頃になると、中国人観光客が世界中を旅すると予測されているが、仙台には、魯迅を顕彰する場所や観光ルートもない。こういうものを生かしていけば、ビジネスチャンスもまだまだある。結局、仙台の人は、持っている資産を、海外に投資せず、東京に持って行ってしまふ。グローバル化や国際化の点ではまだまだ不十分で、仙台の弱みになっている。
- 意外に自分たちの身近な資源についての気づきが少ないのではないか。歴史的建造物の保存活動をしていても、皆さん結構冷たい。仙台にとっての資源であるという見方がまだまだ少ない。
- 国際化というと、結局、ローカルなものが評価されないことには生き延びていけない。そのローカルなものへのまなざしが、私たち市民も含めて非常に足りないと感じる。これに対応する仕組みを用意して、基本構想に盛り込み、10～20年の目指すべき仙台の姿が示せればよい。
- 仙台市の施策を見ると、国際交流は主に観光になっている。一方で、観光を観光で終わらせないための仕組みづくりも必要。文化、観光、スポーツ、自然の他、まちの雑踏も含めてとらえる必要がある。
- 事務局の方から、現行の基本構想において課題と認識している点について、併せて、今後の変化における不確定要因について、それぞれ発言願いたい。
 - 課題認識について内部の議論をご紹介すると、市民協働といいながらその記述が弱いのではないか、仙台と言えば杜の都だが低炭素社会に向けた取組について手を加えるべきではないか、地下鉄東西線や産業政策部分について強化と工夫が必要ではないか、などの意見が挙がっている。
 - 今の都市像に関して、市として総括した公式見解はいまのところない。別途検討したい。
 - 不確定要因に関して、現在の都市像に至った議論の過程を紹介しつつ、事務局の見解を述べたい。現在の4つの都市像は、都市のアイデンティティと将来起こりうる外的要因にどう対応するのか、その組合せでつくられている。1点目の「やすらぐまち」は、健康都市の伝統・風土というアイデンティティに、少子高齢社会への対応という視点でまとめられている。課題としては、都市像の説明として使われている多様性を認め合うという考え方と、市民像を示して導くようなイメージが相矛盾するのではないかという点。2点目の「うるおう杜」は、杜の都の風土というアイデンティティに、地球規模の環境課題への対応という視点。課題としては、諸外国において日本とはけた違いの環境への投資がなされている中で、目標の置きどころをどこにすべきか、シベリアに見る必要があるという点。3点目の「にぎわう都」は、東北の中核都市の伝統というアイデンティティに、グローバル化への対応という視点。課題としては、10年前と比較しても日本のプレゼンスが非常に落ちている中で、非常に重要なポイントとして、仙台の個

性で世界に通用するものは何かという点。4点目の「かがやく人」は、学都100年の伝統にグローバル化への対応という視点。課題としては、世界レベルの研究拠点づくりは本来国の仕事であり、自治体がどこまでできるのかという点。

→上記のような見方をすれば、1～2点目で、成熟社会における人々の暮らしのあり方がある程度規定しており、3～4点目で、成熟社会を支えるための手段を提示している。後者に関しては、3点目の個性を4点目により伸ばしていくという、目的と手段の関係にあるとも言える。このように、現行の基本構想は、総合性という点でさまざま目配りをし、かなり複雑な構造になっている。

- ・多様性については、理想的なものと、最低限これだけはしないというミニマムなものとの間が多様性だと思っている。基本構想としては、目指すべき理想を提示すべきではないか。
- ・構成としては非常に緻密でよくできているが、市民がこれを読むだけではなかなかクリアにできていないことも事実。組立てやメッセージとしての発信方法なども今後の大きな課題。
- ・市民協働やパートナーシップという言葉は、行政側から言う言葉だと受け止められている。市民からすると、行政のオーダーメイドを着ろと言われていたイメージがある。プレゼンテーションの方法や言葉の定義を含めて、市民と一体で一緒にやっていくという雰囲気を出して行かないといけない。